【講義３】表紙の文様について

齋藤　真麻理

一、はじめに

この講義では、古典籍の表紙にほどこされた文様について、名称や命名の由来など基礎的な知識を身につけるとともに、それが古典籍研究にとってどのような意義を有するのか、考えてみたい。

表紙とは、「書物の保護や装飾のため、書物の外側に添えられる」ものである（『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、1999 年「表紙」の項）。そのような機能性に加え、表紙はそれぞれの書物の時代やジャンル、作品内容とも関係している場合が少なくない。

一例を挙げるならば、嘉永２年（1849）刊『平家物語図会（ずえ）』の表紙には、「笹竜胆（ささりんどう）に浮線蝶（ふせんちょう）散らし」が用いられている（https://www.doi.org/10.20730/200007493）。

周知のとおり、源氏の紋は「笹竜胆」、平氏の紋は「揚羽蝶（あげはちょう）」である。つまり、『平家物語図会』の表紙は、源平合戦を連想させる文様で飾られているのであり、表紙が作品内容を物語る趣向となっているのである。

このように、表紙の文様や色、素材まで含めて観察し、理解することで、その書物の内容や文化史的意義をより深く理解することができる。

二、表紙のさまざま

表紙には、大別して「裂（きれ）表紙」と「紙表紙」がある。

「裂表紙」には麻、錦、緞子（どんす）布などが用いられており、実用より装飾性が重視されているといえよう。豪華な絵巻などには金襴（きんらん）緞子表紙が多いが、版本については、献上目的等の上製本以外、裂表紙を使用した例はきわめて少ない。

これに対して、最も多く見られるのが紙表紙である。以下にその代表的な例をあげよう。

・素紙表紙。料紙と同素材の表紙で、共紙表紙ともいう。
・香表紙。丁字で染色した表紙で、薄赤に黄色味を帯びる。江戸時代以前から多用されている。
・渋引き表紙。柿渋を引いた栗色の表紙で、栗皮表紙とも呼ばれる。何度も渋を重ね、光沢を帯びたものもある。比較的虫害に強いとされ、江戸時代初期の古活字版、抄物、仏書、漢籍などに多い。
・紺紙金泥表紙。藍で紺に染めた紙に、金銀の泥で下絵を描いた表紙。「紺紙金泥」とは紺色の紙に金泥で書いたものをさす用語で、経文や仏画に作例が多い。典型的な例として、平安時代の装飾経を挙げることができる。これは紺や紫の染紙に金銀泥を用いて経文を書写したもので、見返しに経典の内容を示す経絵を描く例も多い。文学においては、物語や歌書に紺色金泥表紙が散見する。金銀の切箔や野毛、砂子を紺紙にまき、草花や遠山、霞など、その書物とは無関係な風物を描く例が比較的多いが、作品内容を踏まえた絵画表現も見られる。
・丹表紙。鮮やかな赤橙色の表紙であるが、水銀を用いているために酸化が進み、鉄色や銀色に変色したものもある。表紙は経年により変色する場合が殆どであるから、もとの色を留めている部分を確認する必要がある。
・刷付け表紙。表紙全体に錦絵を印刷した表紙。合巻などに見られる。

三、文様を表す技法

表紙に文様を表現する技法としては、上述のとおり、手描きや印刷によったものがあるが、そのほかにもよく用いられた代表的な技法が二種ある。

第一は、艶出し文様である。凹凸の型を表紙の裏面に当て、表面から磨くなどして光沢を出すという技法であり、江戸時代初・中期に多く用いられたとされる。

艶出し文様は、表紙のオモテ上は凹凸が目立たない。従って、経年劣化した表紙の場合、オモテを一見するだけでは文様がないように見えてしまう。しかし、光線の加減で文様の有無や意匠を判別できる場合があるので、無地表紙と即断せず、注意して観察したい。見返しが剥がれているなど、表紙ウラが露出している部分があれば文様が確認しやすい。是非、表紙ウラにも注目して頂きたい。

第二は、空(から)押し文様である。型を用い、表紙の表面に押しつけて凹凸を浮き出させる技法である。慶長年間（1596～1615）以後に多く見られ、朝鮮本の影響の可能性を指摘する説もある。

明治本にも空押し文様は多く見られるが、明治本の場合はしばしば光沢を伴っている。つまり、艶出しの型押し表紙になっているのであるが、これは西洋の革表紙を意識した意匠であったのかも知れない。

「古典籍」と近代文献」と、両者は一見、距離があるように見える。しかし、実は繋がっている。表紙文様は、それを改めて考えさせてくれる興味深い素材といえよう。

四、表紙の呼称

「三、文様を表す技法」で示した文様は、単一の文様から成る場合と、複数の文様の組み合わせから成る場合があり、文様の配置の仕方にも一定の型がある。それらの呼称について簡単に示しておく。

第一、「地」「繋(つな)ぎ」。この呼称は、単一の文様が連続してほどこされている場合に用いられる。たとえば、四角い渦巻き状の文様「雷文(らいもん)」を一面に連ねた表紙であれば、「雷文地」「雷文繋ぎ」などと呼ばれる。

第二、「◇◇地に◆◆文様」「◇◇繋ぎ地に◆◆文様」。これは、地文様◇◇に別の文様◆◆を取り合わせている場合に用いられる。たとえば、「雷文」を連ねた地文様の上に「唐草(からくさ)文様」が配されていれば、「雷文繋ぎ地に唐草文様」と称する。このように文様を組み合わせた表紙は多く見られる。

第三、文様が一定の間隔をおいて配されている場合。これは「地」「繋ぎ」ではなく、「散らし」という呼称を用いる。たとえば、「二葉葵(ふたばあおい)」の文様が散らしてあれば、「二葉葵散らし」などと呼ぶ。

このほかによく出てくる文様には、円の中、あるいは円形に動植物を描いた文様などが挙げられる。これらは「龍の丸」「鶴の丸」など、「何々の丸」と呼ぶ。また、刷毛(はけ)ではいたような線状の文様は「刷毛目文様」と総称され、線が横であれば「横刷毛目」、縦であれば「縦刷毛目」といったバリエーションで呼ばれる。

五、表紙文様の楽しみ

古典籍の表紙には、四季の景物や動植物、器物、文字、幾何学文様など、さまざまな意匠が凝らされている。吉祥性や季節感を兼ね備え、古くから調度品等々に用いられた文様がある一方、それと気づかないかたちで、現代の私たちの日常生活の中に溶け込んでいる文様もある。

ひとつひとつの文様の出自を尋ねてみると、その豊かな文化的背景が見えてくる。それを知ることによって、古典籍に新たな奥深さを感じることができるのではないだろうか。

参考文献

本資料で使用した用語には、呼称に揺れがあるものがあるが、原則として『日本古典籍書誌学大辞典』に拠った。

・『日本古典籍書誌学大辞典』岩波書店、1999 年

・国文研文献資料部『調査研究報告』25 号別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川剛生編、2004 年。国文研 HP からも公開中）

・長沢盛輝『日本の伝統色 その色名と色調』青幻舎、2006 年

・『日本の伝統色』大日本インキ化学

・「和書のさまざま―書誌学入門―」国文研 HP

・沼田頼輔『日本紋章学』人物往来社、1968 年

平成30年度　日本古典籍講習会

表紙文様について

国文学研究資料館　齋藤真麻理

平成31年(2019) 1 月22日

表紙文様について

Ⅰ　表紙とは

Ⅱ　表紙文様の基礎知識―艶出しと空（から）押し―

Ⅲ　文様のさまざま

Ⅳ　文様レッスン①～⑤

※とくに注記のない古典籍は国文研蔵

Ⅰ 表紙とは

表紙

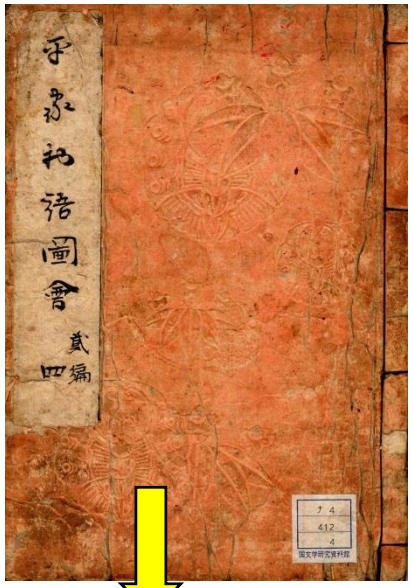
書物の保護や装飾のため、書物の外側に添えられる。

・巻子（かんす）装の一枚物／冊子装の二枚物

・布表紙（裂（きれ）表紙）／紙表紙

※嘉永二年刊『平家物語図会』

https://www.doi.org/10.20730/200007493

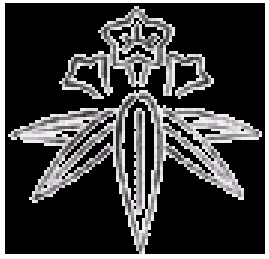


文様拡大・モノクロ

表紙文様＝笹竜胆（ささりんどう）に浮線蝶（ふせんちょう）散らし

源氏の紋は「笹竜胆」、平氏の紋は「蝶」という理解が定着し、源平合戦を連想させる表紙文様へ。

浮線蝶



鎌倉市の市章

書物の時代、ジャンル、内容などにも関わる

表紙の世界／デザインの美しさ

◆布表紙（裂表紙）

麻、錦、緞子（どんす）など布を用いる。実用より装飾性を重視。豪華な絵巻などは金襴緞子（きんらんどんす）が多い。版本については、献上目的等の上製本以外、きわめて少ない。

◆紙表紙

素紙（そし）表紙＝料紙と同素材の表紙。共紙（ともがみ）表紙。

香（こう）表紙＝丁字（ちょうじ）で染色。薄赤に黄色味を帯びる。江戸時代以前にも多用。

渋引き表紙＝柿渋を引いた栗色。栗皮表紙。何度も渋を重ね、光沢を帯びたものもある。比較的虫害に強いとされ、江戸時代初期の古活字版、抄物、仏書、漢籍などに多い。

紺紙金泥表紙＝藍で紺に染めた紙に金銀の泥（でい）で下絵を描いたもの。物語や歌書に多い。

丹（たん）表紙＝鮮やかな赤橙色。水銀を用いるため酸化が進み、鉄色や銀色に変色するものもある。

刷付（すりつ）け表紙＝合巻などの表紙全体に錦絵を印刷。

・『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、１９９９

・『日本の伝統色　その色名と色調』長沢盛輝、青幻舎、２００６

・「和書のさまざま―書誌学入門―」国文研ＨＰ

布表紙

①『大黒舞』
江戸時代前期写　絵巻2軸　貴重書
書誌ID：200006198
https://www.doi.org/10.20730/200006198
縹色地に唐草文様金襴表紙
（はなだいろ）

紙表紙

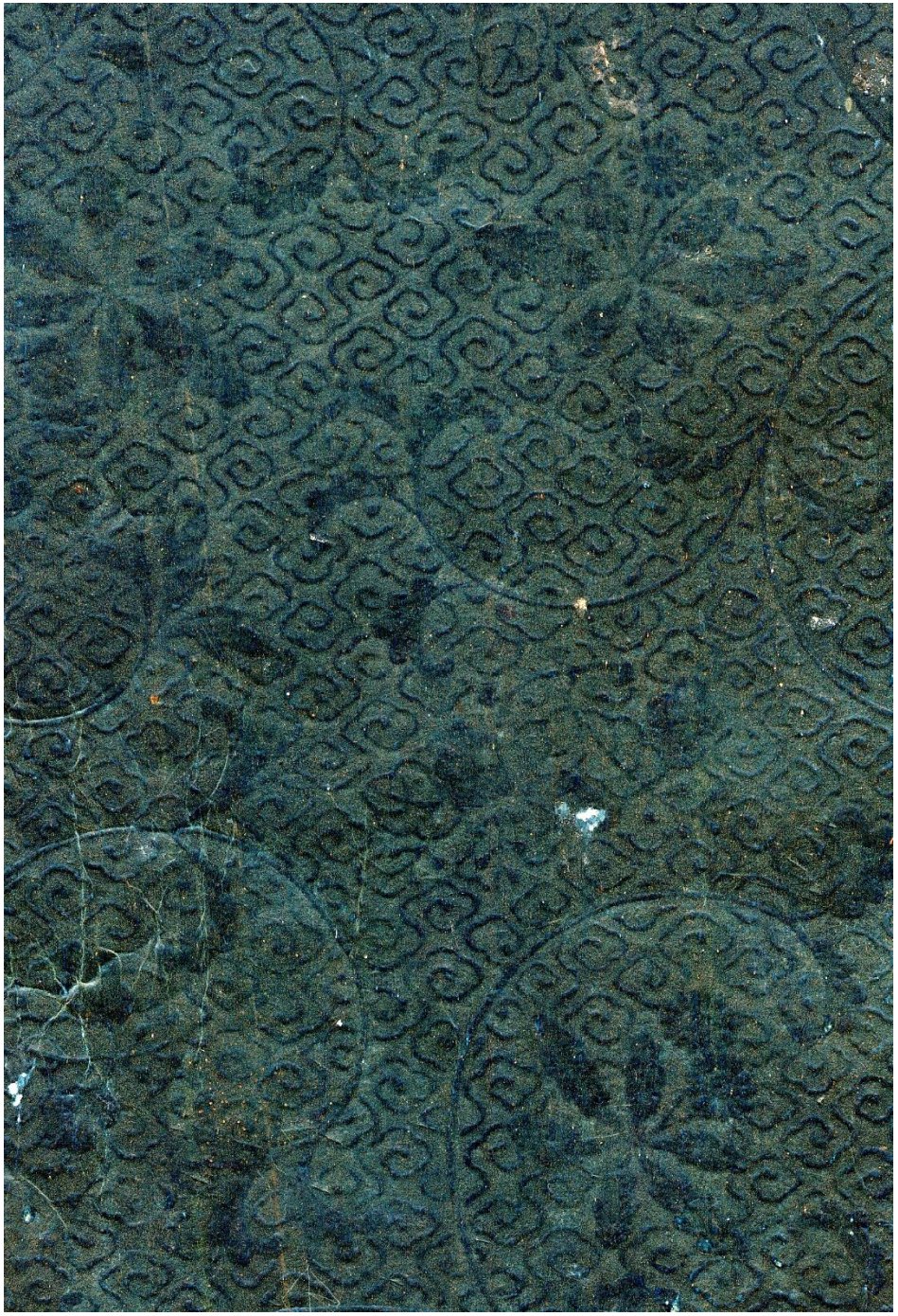
②『太平記』
寛永元年刊 古活字版　41冊　貴重書
書誌ID：200003071
https://www.doi.org/10.20730/200003071
渋引き表紙（栗皮表紙）

③『古今口伝秘抄』
室町時代初期写　1冊
書誌URL:
http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_200000091
紺紙金泥表紙

④『ささやき竹』
江戸時代前期写　3冊
書誌ID:200003084
https://www.doi.org/10.20730/200003084
紺紙金泥表紙

⑤『伊曽保物語』
万治2年刊　1冊
書誌ID：200021086
https://www.doi.org/10.20730/200021086
丹表紙

じらいやごうけつものがたり
⑥『児雷也豪傑譚』
合巻　48冊
書誌ID：200004250
https://www.doi.org/10.20730/200004250
刷付け表紙



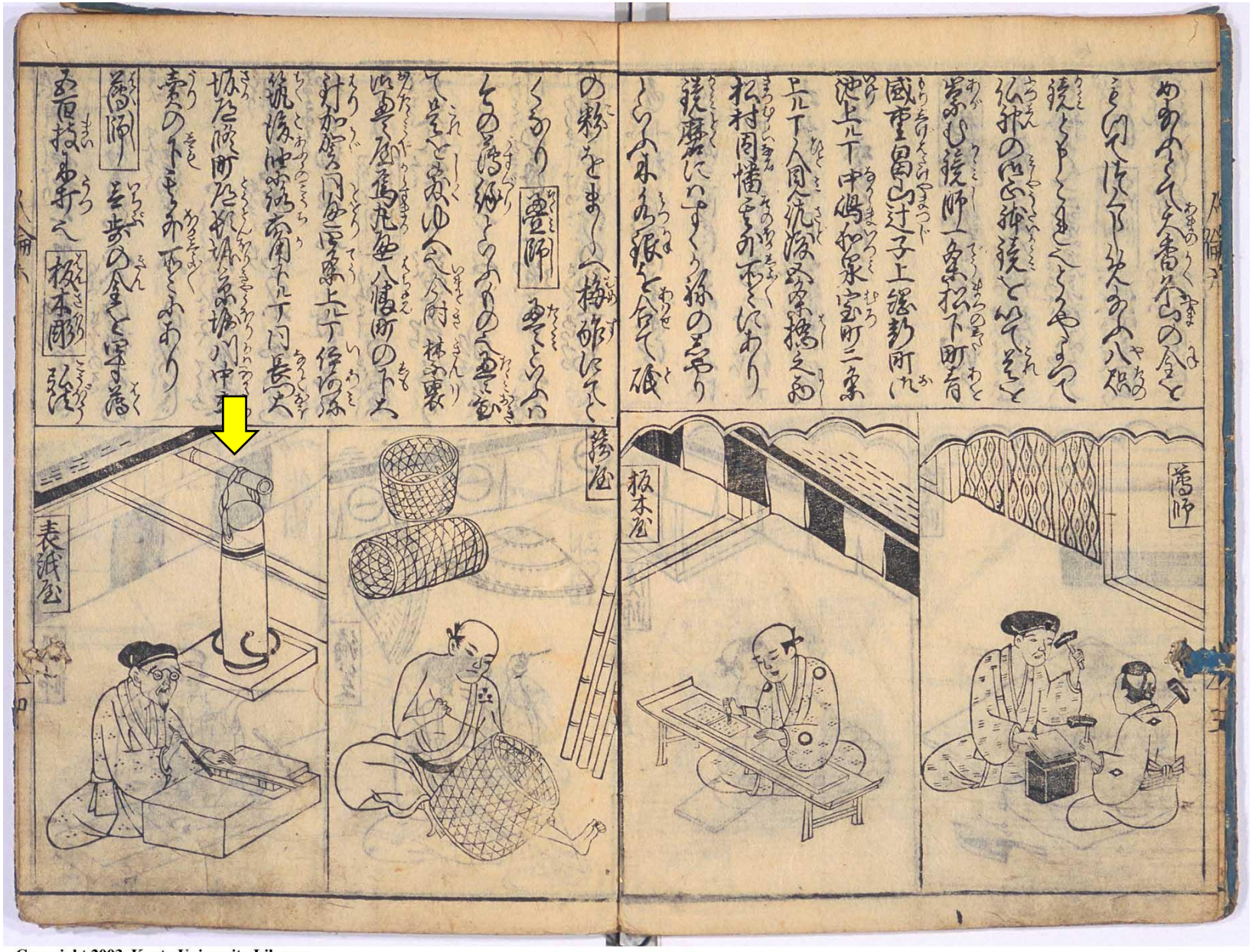
←寛政9年刊『詩仙堂志』
個人蔵。

明治本『観音経和談鈔』
『弁財天利益和談鈔』と
同一の表紙文様。

文様名
「雲文繋ぎに春の七草」

元禄3年（1690）刊『人倫訓蒙図彙』より「表紙屋」

京都大学蔵：http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/library/i101/image/06/i101l0121.jpg



Copyright 2003, Kyoto University Library

Ⅱ 表紙文様の基礎知識
―艶出しと空押し―

艶出し文様

凹凸の型を紙の裏面に当て、表面から磨くなどして、光沢を出した文様。江戸時代初期・中期に多いとされる。光線の加減で判別できる場合もある。見返しが剥がれて露出した裏面に注目。

空押（から）し文様

型を用い、表面に押しつけて凹凸を浮き出させた文様。慶長年間（一五九六～一六一五）以後に多く、朝鮮本の影響かとする説もある。明治本にも多く見られる。

単一の文様のみ／地模様＋別の文様／文様を散らす

※いずれも呼称は一定していないが、ここでは『日本古典籍書誌学辞典』による。

※国文研文献資料部『調査研究報告』１・２・４・５・６・12・13・14号および同25号別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川剛生編、２００４年。国文研HPからも公開中）参照。

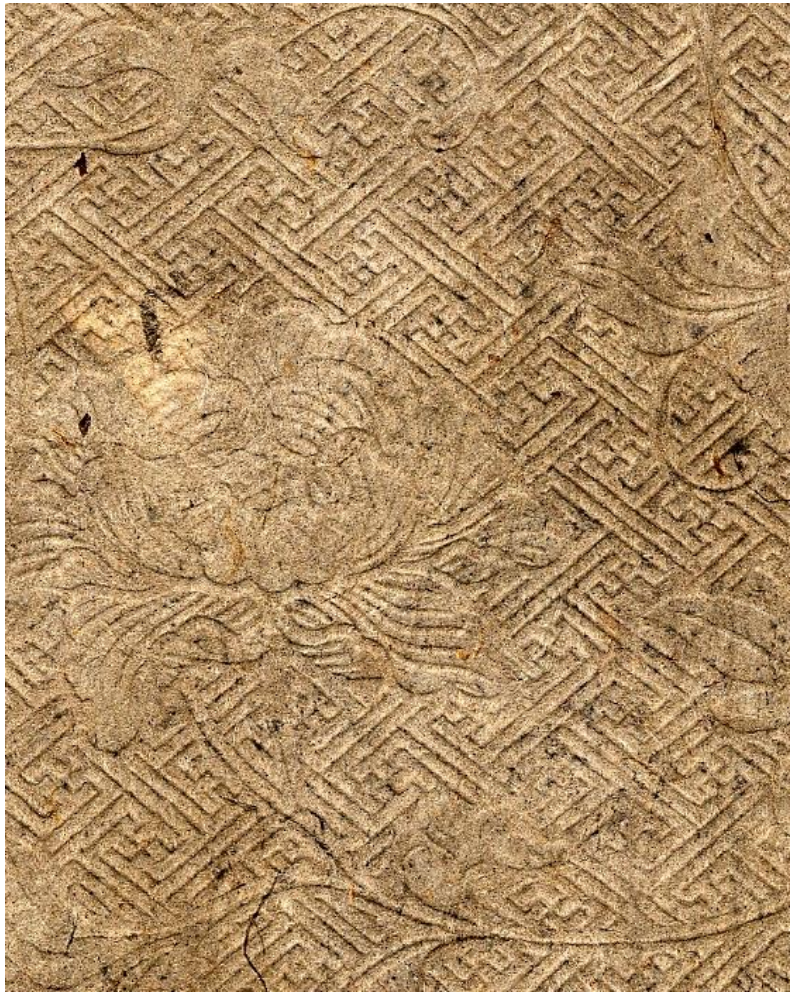
Ⅲ 文様のさまざま

地文様・幾何学文様

①卍繋ぎ（まんじつなぎ）

卍の字をくずして連ねたような形。紗綾形（さやがた）とも呼ばれる。卍は仏菩薩の胸や手足等に現れた吉祥相。

例：卍繋ぎ地に牡丹（ぼたん）唐草



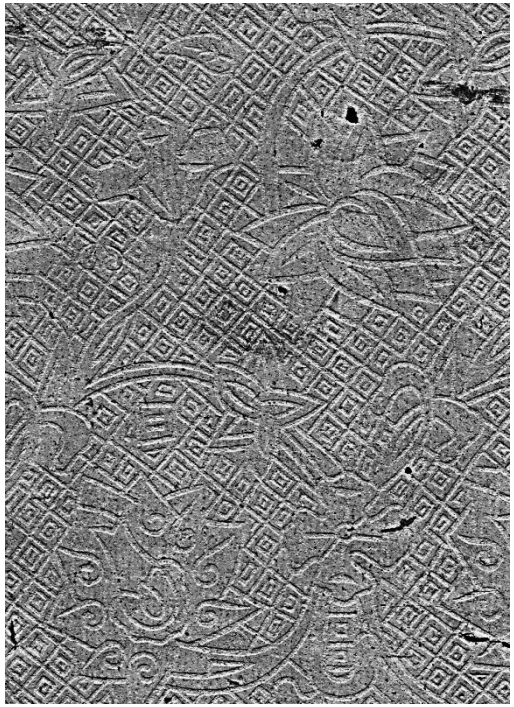
慶安5年刊『奥義抄』（表紙ウラ）サ2−14
おうぎしょう

とらや 干菓子「推古」
法隆寺の卍くずしを
かたどる

②雷文（らいもん）

稲妻形に屈折した線から成る。方形のうずまき状。

例：雷文繋ぎ地に蓮華唐草



明治期刊『青丘詩鈔』（表紙ウラ）　ラ4−1
せいきゅうししょう

③麻の葉

例：麻の葉地に小菊と若松の丸散らし

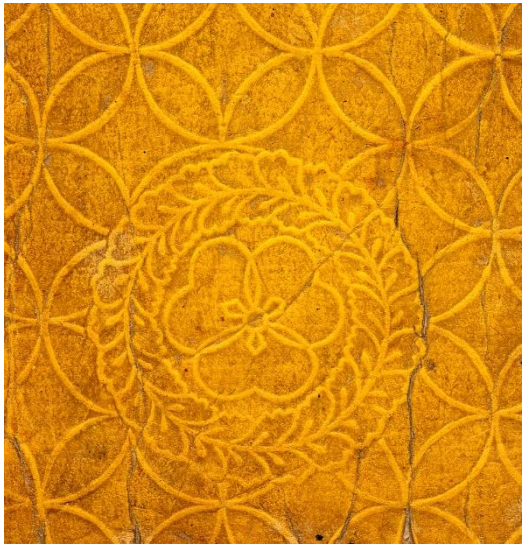
江戸後期刊『頭書鴨長明方丈記』
89−344（高乗家）

例：雷文襷地に雨竜

寛永無刊記『徒然草』（表紙ウラ）　タ5−32

④七宝繋ぎ（しっぽうつなぎ）

例：七宝繋ぎ地に藤輪に片喰（かたばみ）文



文久3年刊

『江戸大節用海内蔵』

えどだいせつようかいだいぐら

マ3−39

⑤菱（ひし）

例：布目（ぬのめ）地に花菱　※布目地も多用される文様

嘉永元年序・刊『偏類六書通』

へんるいりくしょつう

マ3−52

例：松皮菱

江戸後期刊『枕詞燭明抄』

まくらことばしょくみょうしょう

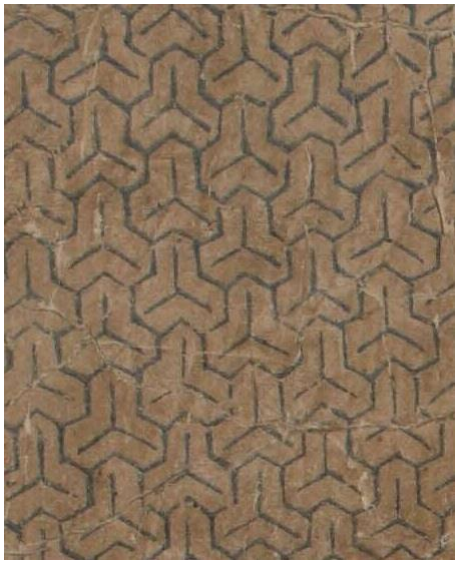
ナ2−289（表紙ウラ）

⑥亀甲（きっこう）

例：花文二重亀甲繋ぎに竜

宝永7年刊『二人びくに』
ナ4−409

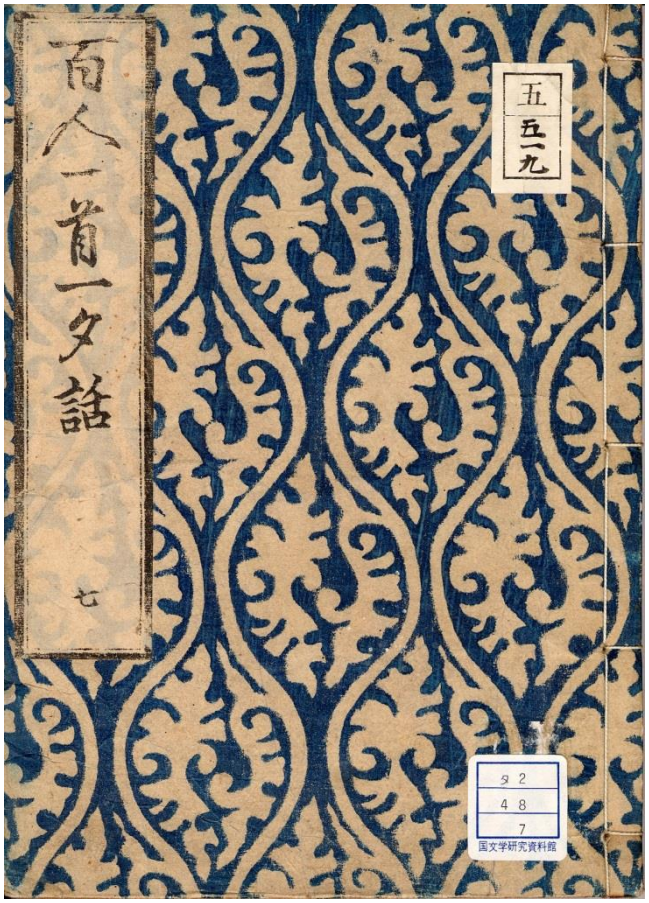
例：毘沙門亀甲（びしゃもんきっこう）



『天林山笠覆寺観音縁起』
てんりんさんりゅうふくじかんのんえんぎ
MX−355−44

東京都武蔵野市のマンホール
（日本マンホール蓋学会HP）

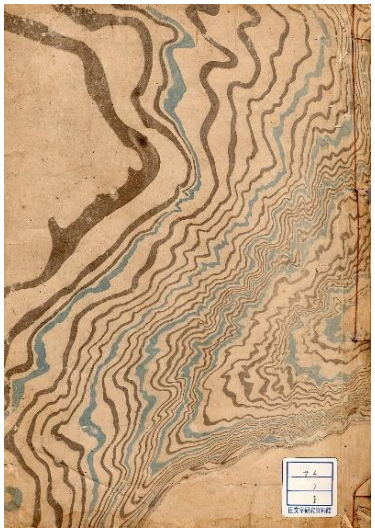
⑦立涌（たてわく・たちわく）
雲がわき起こるさまをかたどった吉祥文。
例：雲立涌



天保4年刊『百人一首一夕話』
タ2−48　ひとよがたり

https://www.doi.org/10.20730/200000999

⑧墨流し



天明4年刊『竹取物語抄』
サ4−7

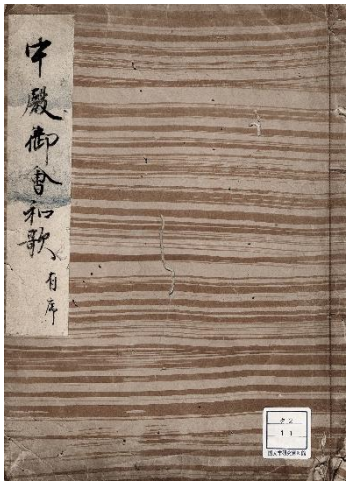
https://www.doi.org/10.20730/200001896

⑨打曇り（うちぐもり）

文明9年写『古今集注』
サ2−20

⑩刷毛目（はけめ）

例：横刷毛目

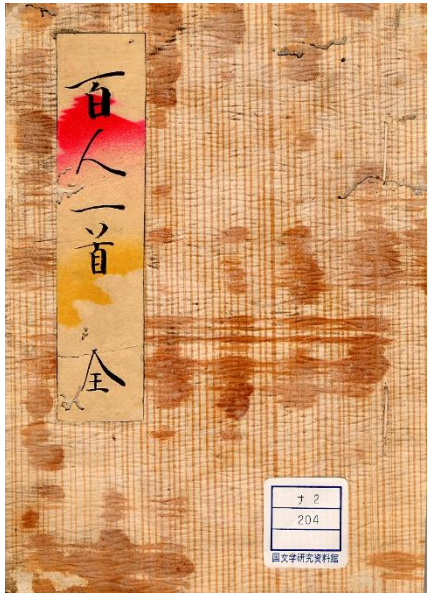


江戸後期写『中殿御会和歌』タ2−11
ちゅうでんぎょかいわか

例：格子刷毛目

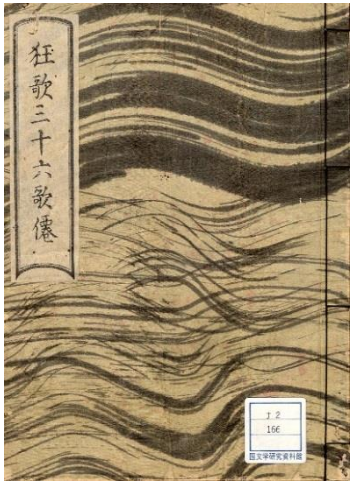
近代写『うつほ物語俊蔭巻』
12−446（初雁文庫）

例：横刷毛目（渋引）



江戸後期『百人一首』
ナ2−204

例：波刷毛目



文政5年刊『狂歌三十六歌遷』
ナ2−166

例：斜刷毛目

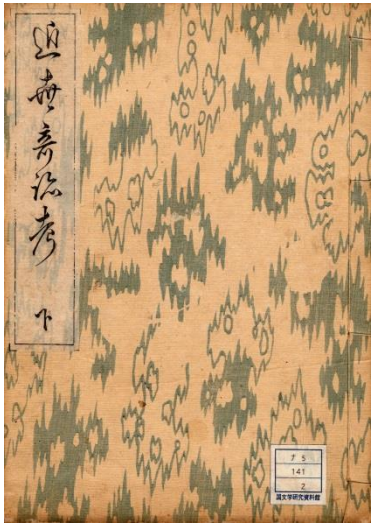
天保14年刊『武器袖鏡』 ラ8−14

自然・動植物文様

①雲文

例：雲中に鶴

例：朽木（くちき）雲



幕末明治期刊『近世奇跡考』
ナ5−141

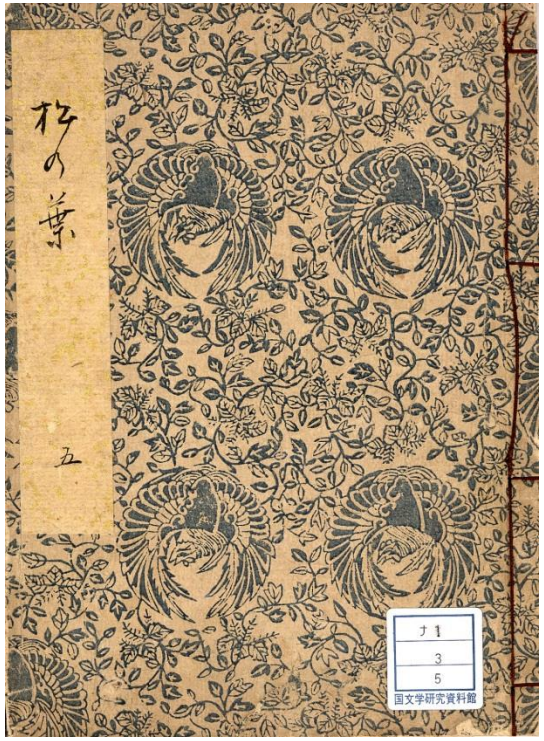
天保14年刊『古今和歌六帖標注』
サ2−1

明治15年刊『倭訓栞』マ3−34
わくんのしおり

朽ち木型の几帳（きちょう）『源氏物語絵巻』「早蕨」

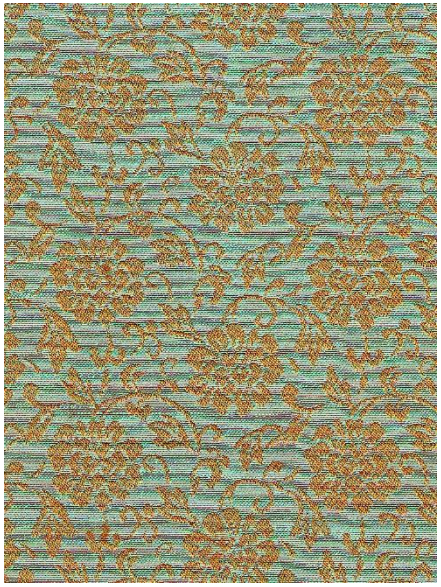
②唐草

例：桐唐草と鳳凰の丸　※古来、鳳凰は桐に棲むとされる



元禄16年刊『松の葉』ナ1−3

例：牡丹（ぼたん）唐草



江戸中期写
『住吉物語』（帙）
タ4−33

③信夫（しのぶ）

例：布目地に信夫の丸散らし

明治9年刊『十符の菅薦』ハ5−7
じっぷのすがこも

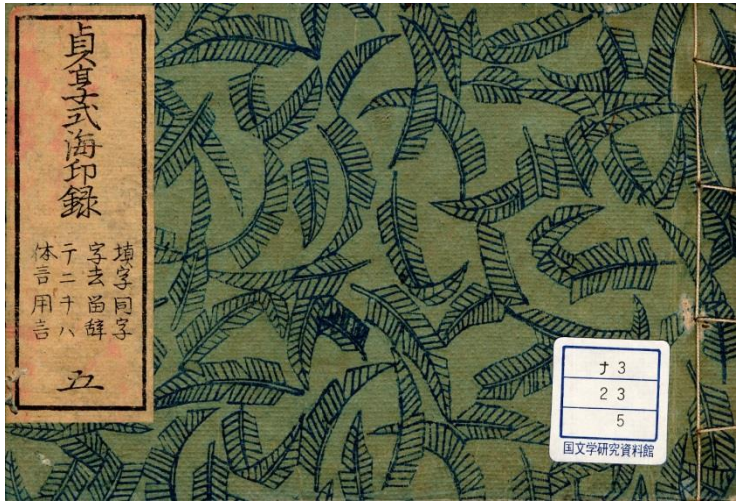
④葵（あおい）

例：布目地に二葉葵散らし

文化5年刊『月詣和歌集』12－331
つきもうで

⑤芭蕉

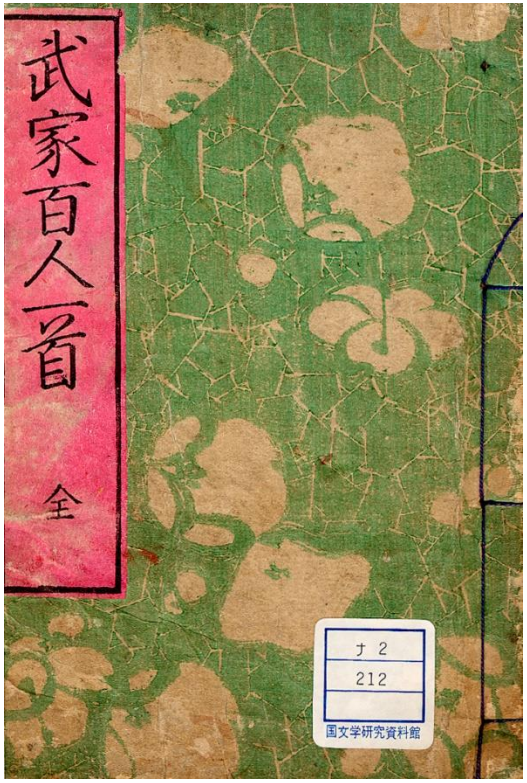
例：芭蕉葉散らし



安政6年序・刊『貞享式海印録』ナ3－23
じょうきょうしきかいいんろく

⑥梅

例：氷割れに梅花



『武家百人一首』
ナ2－212

例：小葵（こあおい）

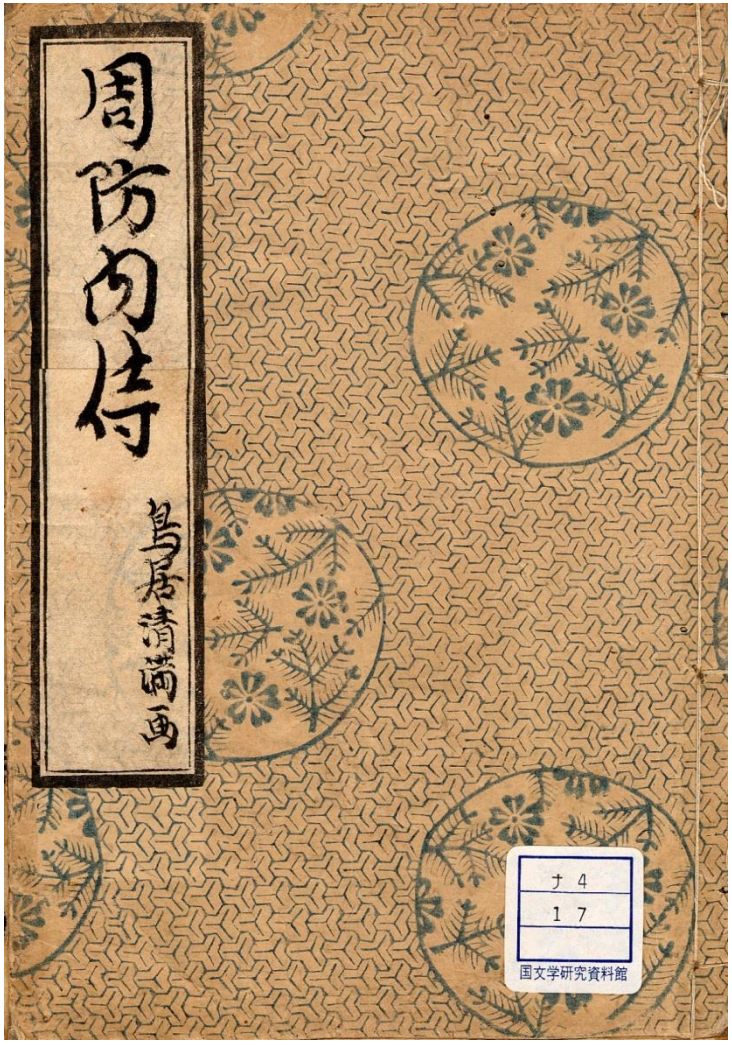
元禄6年刊『伊勢物語絵抄』
12－416

Ⅳ 文様レッスン①

『仙洞御添削百首』ナ2−261

繋ぎに

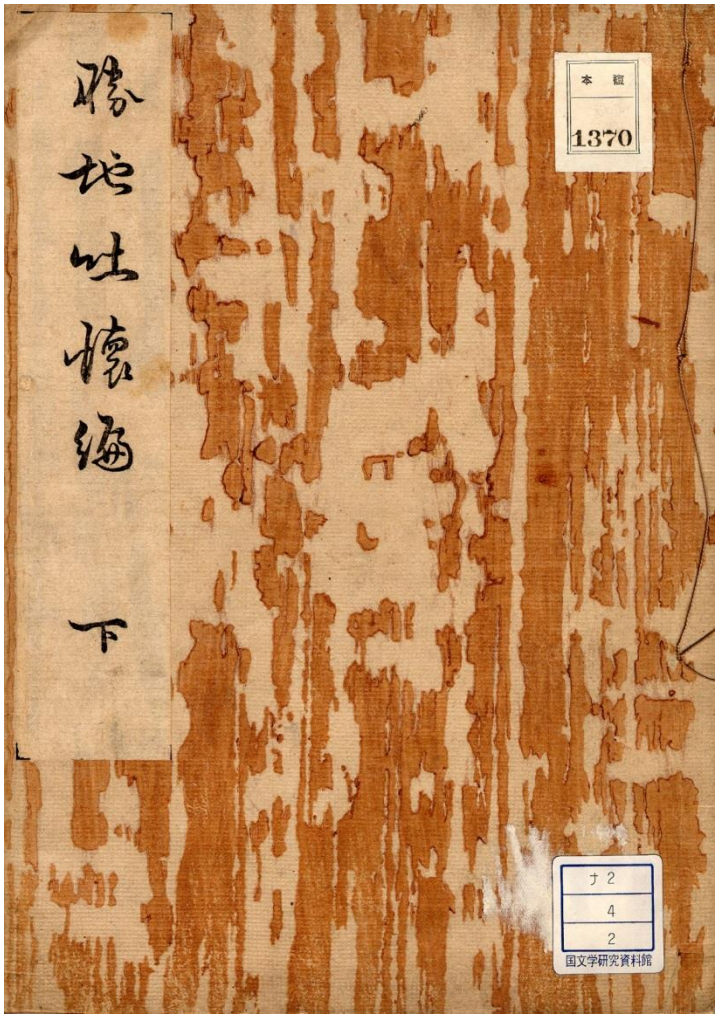
Ⅳ 文様レッスン②



江戸後期刊『周防内侍』ナ4−17

地に　と　散らし

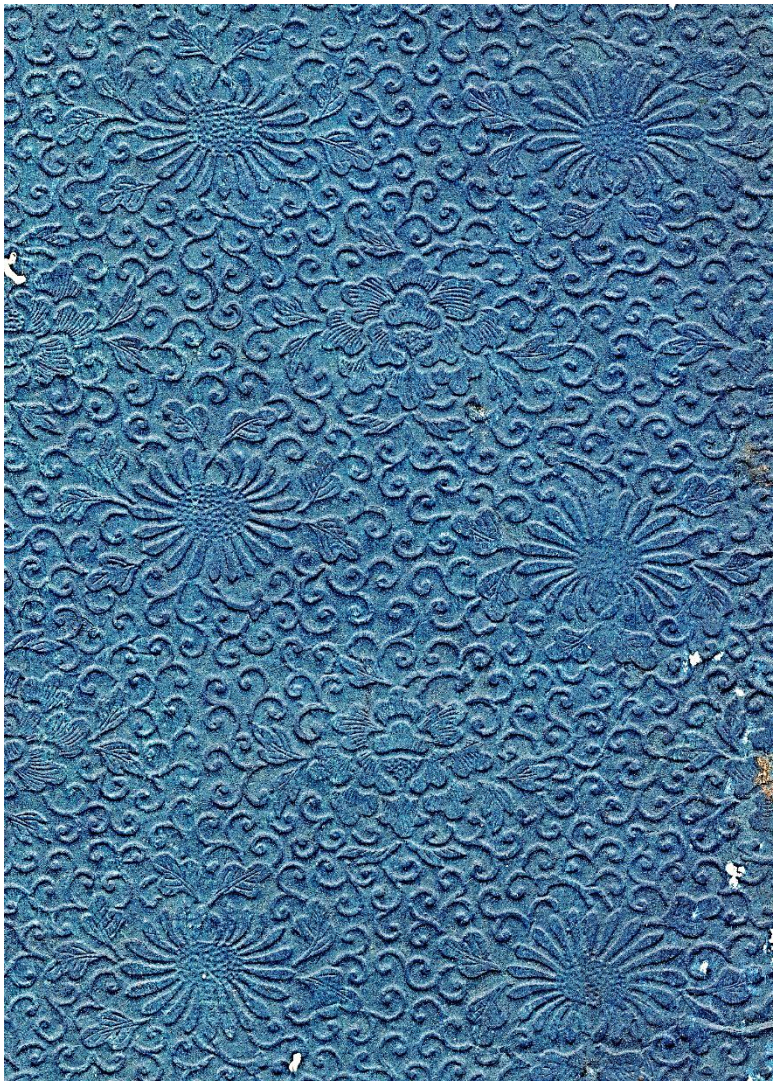
Ⅳ 文様レッスン③



寛政４年刊『勝地吐懐編』ナ２−４

目（　　引）

Ⅳ 文様レッスン④



『国本論』

唐草

Ⅳ 文様レッスン⑤

安永7年刊『奥細道菅薦抄』ナ3－119

参考文献

・『日本古典籍書誌学大辞典』岩波書店、1999年

・国文研文献資料部『調査研究報告』25号別冊『表紙文様集成』
（中野真麻理・小川剛生編、2004年。国文研HPからも公開中）

・長沢盛輝『日本の伝統色 その色名と色調』青幻舎、2006年

・『日本の伝統色』大日本インキ化学

・「和書のさまざま―書誌学入門―」国文研HP

・沼田頼輔『日本紋章学』人物往来社、1968年

ご静聴ありがとうございました

国文研蔵『光琳画譜』より